

「女殺油地獄」の劇作法

——与兵衛と未来成仏の思想——

早川久美子

一 はじめに

主人公与兵衛は、油屋お吉を殺す。その直後の彼の様子は次の通りであった。

日頃の強き死に顔見て。ぞつと我から心も後れ。膝節がたく、
がたつく胸を押し下げく。さげたる鍵をおつ取つて、覗けば
蚊屋のうちとけて。寝たる子供の顔つきさへ。我を睨むと身も
ふるへば。つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴神の。落ちか、
るかと肝にこたへ。

恐ろしさで震えが止まらなかつたが、それでも奪った鍵で戸棚の錠を開け、目指す「上銀五百八十目」を盗んで逃げた。自覚的に罪を重ねてゆく与兵衛の犯行は、人間として認められるものではない。研究史では、このような罪を犯す与兵衛の心理や形象について、

さまざまな視点から解釈が提出されてきた。拙稿で特に注目したいのは、主人公の、人間らしい、意志的な「行為」の有無についてである。

論考としては、廣末保^①『増補近松序説』をはじめ、内山美樹子^②「近松の浄瑠璃における時間の問題」、井口洋^③「女殺油地獄」論——立聞きと食違い——」などがあげられる。

廣末論文では、劇作法の視点として「世話悲劇」論を提示し、次の通り述べている。「曾根崎心中」にしても、「心中天の網島」にしても、「主人公の行為を通して基本的な葛藤を追求し、その過程で、それぞれの主要な段階をおさえ、それを発展的に積み重ね、展開させてゆく」。これに対し、「女殺油地獄」のリアリズムは、「行為を失つたところ、行為がすでに押しつぶされたところ」にはじめてなりたつ。したがって「お吉殺し」という事件は、全く偶然な出来事

ように起る。近松は、その出来事のために、必然的な葛藤を用意することができない」「芝居として最も重要なお吉殺しの場面が、心理的な方法に主としてよらねばならなかつたことは、この作品の本質的性格を物語っている」とし、それゆえに「この作品には悲劇的な感動はないのである」と述べている。

内山論文では、右の廣末説の結論を認めつつも、下之巻で父母の愁嘆を立聞いたときの与兵衛は、それに当らず、「葛藤が生じ、その結果、彼のなかに変化がおこり、今までとは違った意味で今夜中に借金を返す必要を痛感し、お吉になんとしても金を借りようとする行為へと発展する」と言う。井口説は、近松世話浄瑠璃における立聞きの趣向を分析することによって、内山説を論証した。

たしかに、主人公の「行為」は積み重ねられていない。お吉殺しの山場は、「全く偶然な出来事のように」であり、それに続く盗み、逃亡も、それぞれ「行為」といえるものではない。ただし、同じ作者がそれまでの作品と、全く方法の異なるものを描いたとは考えにくい。主人公の「行為」は見出しにくいとしても、それとは別に、方法を考えるための手掛かりを見いだせるのではないだろうか。

二 未来成仏と与兵衛

なぜ、与兵衛という人物には、「行為」を見出しにくいのである

うか。彼は自分の生をどのように考える人物であつたのだろうか。この疑問を解決するために、再び廣末説を参考にした。彼は「世話悲劇」論を説明する中で、主人公の「行為」と信仰に関して、次の通り述べている。

中世叙事詩の無常観や靈験思想は、現世の運命を解釈する思想であつた。ところが、近松の世話悲劇の仏教思想は、人間を行為者として葛藤を追求したその果てに、その主人公たちを未来で再生させる未来成仏の思想である。(略) 仏教を彼岸へ置き直したこの「未来成仏」に縋つて、かつて懺悔すべき罪としてあつた愛欲の世界を、人間を行為者としてその葛藤を生きぬく「悲劇」へととらえ直すのである。

与兵衛の場合、自分自身の来世に向き合う箇所は、二箇所ある。第一は、下之巻豊島屋の場のお吉を殺害したあとである。与兵衛の目の前に、地獄さながらの光景が出現した。

お吉を迎ひの冥途の夜風。はたたく門の幟の音、あふちに売場の火も消えて。庭も心も暗闇に、うち撒く油、流る、血。踏みめらかし、踏み滑り、身うちは血潮の赤面赤鬼。邪見の角を振り立てて、お吉が身を裂く剣の山、目前油の地獄の苦しみ。軒の菖蒲のさしもげに。千々の病は避くれども。過去の業病逃れえぬ。菖蒲刀に置く露の、たまたも乱れて息絶えたり。

そして、逃亡途上の与兵衛は、凶器を捨てるとき、「この脇差は梅檀の木の花から川へ。沈む来世は見えぬ沙汰。この世の果報の付き時と、内を抜け出で、一散に。足に任せて」と述べている。地獄は、墮ちるべき死後の世界として出現させているようである。与兵衛は、それを意識しながら、自分の来世を顧みようとはしなかった。さて、第二は、作品最後のところで、与兵衛が自白した、その会話文である。

それは、お吉の三十五日の連夜に、与兵衛が、何食わぬ顔で豊島屋に弔いに訪れたところを役人に捕縛されたときのこと、与兵衛は、「覚悟の大音上げ」、以下のような自白を行った。

一生不孝、放埒の我なれども。一紙半銭盗みといふことつひにせず。茶屋、傾城屋の払ひは、一年、半年遅なはるも苦にならず。新銀一貫目の手形借。一夜過ぐれば親の難儀。不孝の咎、勿体なしと思ふばかりに眼つき。人を殺せば人の嘆き、人の難儀といふことに、ふつ、と眼つかざりし。思へば二十年来の不孝、無法の悪業が。魔王となつて、与兵衛が一心の眼をくらまし。お吉殿殺し、銀を取りしは河内屋与兵衛。仇も敵も一つ悲願、南無阿弥陀仏と言はせもあへず、取つて引つ敷き。

その後の与兵衛は、「千日」で処刑されることを暗示し、つづく結句は、「果ては千日、千人聞き。万人聞けば十万人、残る方なく

世の鑑、伝へて君が長き世に、清からぬ。名や残すらん。」となっている。

作品には、「未来成仏」という言葉は描かれていないが、与兵衛は、「仇も敵も一つ悲願、南無阿弥陀仏」と述べようとしたのであるから、ここで初めて未来成仏を願ったことになる。ただし、彼に「行為」を見出すことはもはや不可能である。

研究史をふりかえるならば、その自白のところでは、与兵衛に改心の情がくみ取れるか、否かという心理の問題^⑤、あるいは救済の有無の問題が取り上げられてきた。救済を論じたものに、沙加戸弘「近松と「王舎城の悲劇」——特に『女殺油地獄』を中心として——」^⑦と、正木ゆみ「お吉と与兵衛の「救い」のゆくえ——近松『女殺油地獄』と親鸞——」^⑧がある。

沙加戸は、与兵衛は救済されたと見、「王舎城の悲劇」の説話を掲載した『観無量寿経』「下品下生」や、『びんばしやらわう』第五などに見える阿闍世の発心悔悟と救済がその背景にあったことを指摘した。

正木は、沙加戸論文を踏まえつつ、救済については、異なる解釈を提示している。与兵衛は、本心から悔悟して自白し、「仇も敵も一つ悲願」と往生を願ったにもかかわらず、作者は与兵衛の「本願往生」を保証しなかったと言う。その根拠は、まず、結句が「浮名

「評判型」であること、古浄瑠璃『びんばしやらわう』で「往生」した阿闍世とは大きく違い、与兵衛の「本願往生」を保証する本文は一切記されていないこと、さらにお吉は親鸞を信仰し、「他力の信心」によって往生を保証されるが、与兵衛には、「称名」の機会が与えられず、両者を対比的に描いていることをあげている。

正木説に異論はないが、拙稿第五節のところ、そこでは言及されていない、与兵衛が救済されずに終わる理由を検討してみたい。

三 仏教行事と信仰心のない与兵衛

続いて、与兵衛の信仰心の有り様を、作品の展開にそって確認したい。

「女殺油地獄」は、群衆が野崎観音開帳へ向かうとする道行から始まり、中之巻の山上講による下向の際の念仏、下之巻では、お吉の三十五日の速夜など、作品全体に仏教行事、それに参詣する信者の読経の様子が描き出されている。以下は、仏教行事と、与兵衛のふるまいを中心に筋の展開をまとめたものである。

〔上之巻 開帳と与兵衛〕

冒頭、野崎参りの道行から始まる。道行の最後の箇所には、参詣者の祈りの様子が描き出されている。詞章は、次の通りである。「御代長久の岡山を。歌には忍の岡とも詠み。佐良々山

口一つ橋、渡して救ふ御願力。無量無辺の聚福閣、慈眼視衆生念彼観音。身得度者の御誓ひ。問ふも、語るも、行く船も、徒歩路拾ふも諸共に、迷ひを聞く腰扇、御堂に。ねんじゆを繰り返す。」

徳庵堤で、与兵衛は、参詣するためではなく、馴染みの遊女をめぐって、田舎客と張り合うためにやって来た。そこで、近所の油屋お吉と出会い、お吉に日頃の不良な行いを異見されるが、聞く耳を持たない。与兵衛は、田舎客に喧嘩を挑む。その時、参詣に向かう武士の小栗八弥に泥を投げ付ける失態を犯したが、結局は許されている。お吉は、泥まみれの与兵衛を介抱しつつ、異見をする。下向の八弥と再び出会うが、罪は問われない。

〔中之巻 山上講と与兵衛〕

最初の詞章は、「掲諦くく波羅掲諦。波羅僧掲諦、掲諦く。波羅掲諦、波羅僧掲諦。唵呼嚕く旋茶利摩登枳。唵阿毘羅吽欠。おん油屋仲間の山上講。」という山上講の読誦から始まる。山上講とは、山上嶽に参詣する信者集団であるが、その勤めを終えての帰りに河内屋を訪れた。

一行は、迎えに出た与兵衛の義理の父親、徳兵衛に対して、与兵衛だけが不参加であつたうえ、下向の坂迎えにも出向かな

かつた旨を告げる。徳兵衛は、与兵衛がその経費を親や兄からせしめていたことを明かしつつ、素行を嘆く。

与兵衛が帰宅。病床にある与兵衛の妹、おかちは、山伏が祈禱を行ううち、先代の死霊の告げであるとして「与兵衛が契約の思ひ人を請け出し、嫁にして。この所帯を渡したも。」などと口走った。告げの実行を与兵衛は迫る。徳兵衛が拒否すると、与兵衛は徳兵衛を足蹴にする。おかちは、堪えられず、与兵衛に教えられて死霊の演技をしたことを明かす。徳兵衛と母お沢は、それぞれ与兵衛に異見。お沢は乱暴を働いた与兵衛を勘当する。

〔下之巻、速夜と与兵衛〕

豊島屋の場は、門徒仲間が、速夜に寄り集り、「変成男子の願を立て、女人成仏誓ひたり。願以此功德平等施一切、同発菩提心往生安樂国。釈妙意。三十五日お速夜の志。お同行衆寄り集り、勤めもすでに終りける。」と、回向文を唱えているところから始まる。

続いて、与兵衛殺人の証拠が発見される。そこへ、「気味悪ながら、折々の問ひ訪れも、我がしたと。人に言はれじ、悟られじと、一倍横柄、そらさぬ顔。」で、与兵衛が姿を現す。七左衛門からお吉殺しの証拠を突きつけられると、白をきった。

官人から逃れようとして暴れるが、結局は捕縛される。

本作では、上・中・下巻を通して、開帳や講に参詣する群衆の様子や、经文を唱える信者の声を聞かせている。一方の与兵衛は、彼らに背を向けつつ、親兄弟からくすねた金、またお吉を殺害し、奪った金で、思うまま快樂に耽る。お吉の速夜に訪れても、悔みの気持ちは見られないとする。以上、与兵衛は、繰り返し登場する仏教徒の中にあつて、一人信仰心もなく、浮き上がった存在である。彼が関心を寄せるのは、この世の快樂だけであつた。与兵衛に人間らしい「行為」を見いだしにくいのは、日頃から信仰心を欠いていることと結び付いているようである。作品の中には、やはり廣末が指摘した「未來成仏の思想」は発見できない。

四 お吉殺しの意味

ところで、殺されるお吉は、二十七歳の美しい豊島屋の女房であつた。気さくで、心優しく、悩める徳兵衛夫婦の良き相談相手となつている。その気質は殺害される直前まで、与兵衛に対しても変わりなかつた。また、下之巻最後の豊島屋、速夜において、門徒仲間へ、お吉をさして「上人の御恩徳、報謝の心も深かりし。」と述べていることから、熱心な浄土真宗の門徒であつたことがわかる。そんなお吉が、油の中で、血まみれとなつてのたうちまわるとい

悲惨な最期をとげた。

殺しの場面は、リアリズムの観点から評価されている。あらためて、描写を確認し、与兵衛のお吉殺しの意味を考察したい。

与兵衛は、お吉を恐れさせながら言う。

灯にうつる刃の光、お吉びつくり。今のはなんぞ与兵衛様。イヤなんでもござらぬと、脇差後ろに押し隠す。それ／＼きつと目もすわつて。なう恐ろしい顔色。その右の手こゝへ出さしやんせ。おつと脇差持ち替へて、これ見さしやれ。何もな／＼と、言へども、お吉身もわな／＼。

逃げようとしたお吉は、門の口に気を配る。与兵衛が恫喝し、飛びかかる。お吉に同情を示すということもなければ、殺しをためらうということもなかった。

ハテきよろ／＼、何恐ろしいと。付け回し／＼、出会へと喚く。一声。二声待たず飛びかゝり、取つて引き締め。音骨立つるな女めと。吭の鎖をぐつと刺す。刺されて悩乱、手足をもがき。そんなら声立てまい。今死んでは、年端もいかぬ三人の子が流浪する。それがかはい、死にともない。銀もいるほど持つてござれ。助けてくだされ与兵衛様。オ、死にともないはず、尤も／＼。こなたの娘がかはいほど。おれもおれを可愛がる親仁がいとしい。銀払うて男立てねばならぬ。諦めて死んでくださ

れ。口で申せば人が聞く。心でお念仏、南無阿弥陀。南無阿弥陀仏と引き寄せて、右手より左手の太腹へ。刺いては抉り、抜いては切る。

近松の「釈迦如来誕生絵」(正徳四年^⑧)、第二段には、お吉殺しと同様、吉祥女が悪漢のため血まみれの体で殺害される箇所がある。吉祥女は、悉達太子の跡を追って后耶輪陀羅女とともに、良門というところまでやって来た。提婆達多の手下である橋曇弥と伯了頓が、耶輪陀羅女を奪おうと切りかかり、耶輪陀羅女を逃そうとした吉祥女は、そこで命を落とす。その最期は、次の通りである。

のつけに返して起き上がり吉祥が高腿を抜き打ちに丁ど切。両方半死半生の惣身は朱にそみながら、よろぼひ寄つてははたと切打付てかつはと伏し。両眼に血は入たり。声をしるべに都合しは修羅の。巷のごとく也。

罪もない女性が敵役に惨殺される筋は、近松作「平家女護島」(享保四年) 第四や、「津国女夫池」(享保六年) 第二にも見出すことができる。与兵衛の犯行は、情け容赦がないという点で、近松がそれまで描いてきた時代浄瑠璃の敵役の仕業に相当する。ただし、与兵衛は、敵役ではない。

与兵衛の形象について、荒木繁は、「女殺油地獄」の方法について」の中で、岡本文弥「雁金文七秋の霜」(元禄十五年初演) など

雁金文七系の作品に登場するあぶれ者、文七との比較から分析している。荒木説によれば、文七の場合、性は善であったが、外材的な悪の働きかけによつて悪行、破滅が導かれていた。与兵衛は、性が悪であつて、それゆえの悪行であるという。その悪とは、中之巻以下に見られる彼の狡智・不貞腐れ・残忍などは、たしかに悪徳であるとしても、悪の権化というのではなく、「人間のな歪み」と捉えられるものである。そのような性格は、喜劇的描写によつて浮彫りにされているので、われわれと「血のつながつた人間としての親近感を感じる」だけのものになっていと述べている。

根っからの悪者ではないものの、心を入れ替えようと努力しなれば、破滅に向かう人間、与兵衛は、劇の最初はそのような人物であつたといえる。だからこそ、父母やお吉は、与兵衛を破滅させまいと、異見を繰り返す。上之巻、まず、お吉が父母の立場に立つて異見をしている。

この諸万人の群衆を突きつけ押しつけ、目に立つ風俗。本天満町河内屋徳兵衛といふ油屋の二番息子。茶屋／＼の訳もろくに立てず。あのごま見よと指さしするが笑止な。こうたうな兄觸を手本にして。商人といふものは一文銭も徒にせず。雀の巢もくふに溜る。ずいぶん稼いで親たちの肩助けと。心願立てさんせ。脇へは行かぬ、その身の莊嚴。ハア氣に入らぬやら返事が

ない。姉おぢや、早う參らう。

中之巻河内屋と、下之巻最初の豊島屋の、両方の場でも、父母の異見が描かれている。二人はそれぞれの立場から与兵衛の不行跡を心配しつつ、わが子ゆえの不幸と鬼子を生んだ自分自身の悪業悪縁を問うている。父親は、もし与兵衛がこのまま更生することがないならば、将来は極悪人に成り下がるに違いないと考えている。それがわかる徳兵衛の会話を次に引用し、波線を付した。

○これほど万面倒見て。大きな家の主にもと。丁稚も使はず肩に棒、稼ぐほど遣ひほつく。おのれ今の若盛り。一働き稼ぎ、五間口、七間口の門柱の。主にと念願を立ててこそ商人なれ。たつた一間間半の門柱に念かけ。母に手向ひ、父を踏み、行く先偽り騙り事。その根性が続いたら、門柱は思ひもよらず。獄門柱の主にならう。親はこれが悲しいと、わつと叫び。入りければ。〔中之巻 与兵衛に対する会話文〕

○我らは成人の与兵衛に世話を焼く。いづれの道にも、子に世話病むは親の役。苦勞とも存せねども。引き付けて一所にあるうちは氣も落ち着く。あのやうな無法者を勘当すれば。自棄を起し、明日火に入るも構はず。謀判、偽判、一貫目の銀に十貫目の手形して。一生の首綱か、る例もあることと思ひながら。〔下之巻 お吉に対する会話文・与兵衛は立聞きによつて知る〕

豊島屋に姿を現した与兵衛に、今度はお吉が、父母から預かった錢八百を取らせつつ、次の通り異見することとなる。お吉殺しは、その直後の犯行であった。

この錢一文も徒にはなるまい。肌身に付けて一稼ぎ、お二人の葬礼に。立派な乗物に乗せうといふ気がなければ。男でも杭でもない。それをお背きなされたら、天道の罰、仏の罰。日本の神々の逆罰が当つて。将来がようあるまい。まづ頂いてと、差し出せば。

与兵衛は、指摘されている通り、悪の権化というわけでもなかった。前述した通り、劇の最初から、彼は、信仰心を持たないために日々の仏教行事を無視し、仏教集団から外れ、ひたすらこの世の快楽を求めようとする。なおかつ行く末を案じた父母の、度重なる異見にも耳を傾げようとしなかった。お吉殺しとは、そのような与兵衛によって引き起こされた犯行であり、その描写は、敵役の仕業のような残酷さを映し出している。

五 与兵衛の最期

第二節でも述べた通り、お吉を殺害した与兵衛は、自分が墮ちるに違いない地獄を見、それと知りながら意に介することがなかった。それ以降、彼は、ますます世俗的利養をもつばらにし、彼女の死を

悼むこともなく、盗んだ金で茶屋に入り浸ることになる。犯行後の与兵衛は、もはや信仰心を欠く者というより、仏教の教えに敵対する者と見なすことができそうである。

そのように与兵衛を捉えるとき、彼の末路は、やはりありふれたものではないはずである。

まず、与兵衛殺人の証拠に注目したい。それは、「半切紙に一つ書き。十匁一分五厘、野崎の割付。五月三日とばかりにて、誰から誰への名宛もなく。色こそ変れ、所々血に染まつたる書き出し一通不思議の物と手に取り回し。」である。お吉の連夜に、豊島屋の家の梁から鼠が蹴落としたものであり、お同行衆によって見出された見れば、与兵衛の筆跡であった。「野崎参り」に向向していたということもあって、与兵衛犯人の証拠と見なされるのである。七左衛門は言う、「お吉を殺し手も、大方これで知れました。三十五日の連夜に当り、鼠がこれを落すといふも。亡者が知らせに疑ひない。これも仏の御恩徳。ア、南無阿弥陀とひれふして、喜ぶ心ぞ道理なる。」と。

もともとこの割付に関しては、唐突に過ぎるという見方もなされていた。唐突であるために、その「不思議の物」は印象づけられていくようである。

「十匁一分五厘」という金額については、下之巻、最初の豊島屋

の場で、お吉が父母から受け取って、与兵衛に手渡した「銭八百」と近い数字となるようである。銭を与えるとき、お吉は、「これこの銭八百、この粽、こな様へ遣れと天道から降りました。頂かしやんせ。なんぼ浪人でも、際の日宝。まんが直ろ」と述べていた。与兵衛は、その「銭が足らぬ」と言って、直後にお吉殺害に及ぶことになる。

正徳期より、享保七年までは、銀の高値が続き、通貨状況が安定することはなかった。¹³『説史総覧』¹⁴所収の「近世相場一覽」によれば、本作が上演された享保六年（大坂）の相場は、銀（匁）は、金一兩につき、新銀で四八・〇〇〜五六・〇〇、銭一貫文につき、新銀で一・二〇匁程度である。「十匁一分五厘」は、その年の、一・二〇匁という銀の値から計算すれば、銭で、九〇六・二五文程度となる。また、享保三年から享保六年の相場を確認すれば、享保三年は、銭一貫文につき、新銀（匁）で、八・五〇〜八・六〇、同四年は、同じく九・五〇〜九・六〇、同五年は、同じく一〇・〇〇匁、そして同六年の、一・二〇匁という変動があった。その変動幅を考慮し、仮に、新銀一二・七〇匁という数字から計算した場合、「十匁一分五厘」は、ほぼ「銭八百」となる。判然とはしないがら、お吉と関わる数字を描いていた可能性がある。

繰り返すが、与兵衛を追い詰める割付は、皆が「亡者が知らせ」

として取り扱っている。信仰心を持たず、お吉を殺した与兵衛の罪に対する応報として描いていたものと考えられる。

次に、捕縛以後の場面をとり上げたい。自白の箇所以外は、これまでの研究で注意されていないが、それは、死後、人間が裁きを受けるといふ閻魔王庁の法廷と関係がありそうである。

閻魔王庁や地獄絵は、鎌倉時代中期から、江戸時代にかけて、多くの地藏絵や六道絵、十界曼荼羅の普及などによって通俗化していった。十七世紀初頭には、「熊野観心十界曼荼羅」が登場し、熊野比丘尼たちがそれを絵解きして歩いた。

説話で、閻魔王庁の様子を描いたものに平安時代の『地藏菩薩靈驗記』（貞享元年刊行）、『今昔物語集』の地藏菩薩靈驗譚卷十七（第十八、第十九、第二十、第二十一、第二十二、第二十四、第二十六、第二十九）など多数ある。¹⁵ここでは、『地藏菩薩靈驗記』、『今昔物語集』より例を挙げる。

○独広野二向テ行去ニ西北ノ方ニ巍々タル樓門アリテ大ナル官舎アリ。大殿ノ左右ニ各一舎アリ。左ノ舎ハ秤量ヲ置テ亡人ノ罪業ノ軽重品ヲ懸ク。右ニ一舎アリ。亡人ノ姓名死生ノ定数ヲ勘テ筆録ス。又殿ノ左秤量舎ノ前ニ高台アリテ台上ニ秤量幢アリ。以テ舎中ノ備ヲ標幟ス。今此ノ官舎台ハ有情ノ業感所成ノ所ナリ。次ニ鏡台アリ。淨頗梨鏡ノ影ヲ移シテ一生ノ作業明々

トシテ見ヘタリ。(中略) 其々ニ地獄ノ苦ヲ受ルニ究。泣哀ム
声ハ太山モ崩ルバカリ。恐シトモ云バカリナシ。

『地藏菩薩靈驗記』卷第七十八

○我レハ此レ、然々ノ人也。本国ヨリ本寺ニ行ク間、途中ニシテ
病ヲ受テ、忽ニ此ニシテ死ヌ。而ル間、我レ独リ広キ路ニ向テ
西北ノ方ニ行ク。即チ門樓ニ至ル。其ノ内ニ器量キ屋共有リ。
此ヲ見ルニ、檢非違使ノ庁ニ似タリ。其ノ所ニ官人其ノ数有テ、
庭ノ中ニ着並タリ。多ノ人ヲ召シ集メテ、其ノ罪ノ輕重ヲ定ム。
並、多ノ人ヲ捕ヘテ縛テ獄ヘ遣ル。其ノ泣キ叫ブ音、雷ノ響ノ
如シ。

『今昔物語集』卷第十七第十八

説話に記された閻魔王庁の様子をまとめると、ほぼ次の通りであ
る。地獄につながるその庁は、檢非違使庁のようであり、樓門や庭
があつた。そこには官人がいて、多く人を召し集めて、罪の輕重を
定め、地獄に送っている。縛られた罪人は、雷の響きのような大声
を上げて泣き叫ぶ。

さて、本作との共通項は、以下の通りである。

第一に、庁の外観と官人である。与兵衛は、「小庭の内」で、逃
げようとするが、控えていた「門の前に。兩三人」によって、ねじ
据えられた。彼らは「檢非違使の別当、大理の庁の官人なり」と描
く。第二、罪の輕重を定める点である。本作に「淨願梨鏡」は存在

しないが、罪状がたちまちのうちにさらされる場面が設けられてい
る。森右衛門が与兵衛の袷を持って駆け付け、「大理の庁より御不
審。只今証跡の実否。おのれが命、生死二つの境なるぞ」と言いつ
つ、それに酒をこぼしかける。酒は、朱の血潮と変じた。これを動
かぬ証拠として、与兵衛の刑が定められる。第三、捕縛された罪人
は大声を上げて叫ぶという点である。第二節のところで述べた通り、
捕縛された与兵衛はやはり「覺悟の大音上げ。」という様子で自白
をしている。

与兵衛は、「大理の庁」の裁きを受けて、刑場へと連行された。
そこには、やはり仏教に敵対する者の、救済されることのない末路
が示唆されているのではないだろうか。

六 まとめ

本稿は、主人公の「行為」と「未来成仏の思想」を論じた廣末の
「世話悲劇」論に抛りつつ考察した。与兵衛の「行為」については、
すでに先学たちによって議論が重ねられているが、その「行為」を
支える「未来成仏の思想」は、論じられていない。

検討の結果、与兵衛は、信仰心を持ち合わせず、そのため「行
為」が見出しにくい人物であるということがわかった。与兵衛が自
分の来世に向き合う場面は、二箇所確認できる。第一は、お吉を殺

し、銀を奪った直後であり、そこで与兵衛は、意識的に自分の来世を無視している。第二は、作品最後の場面である。捕縛された与兵衛は罪を認め、未来成仏を願うが、その時は、与兵衛の人生の終わりであり、もはや「行為」を見出す余地がない。さらに、劇の展開を見れば、上之巻の野崎観音開帳、中之巻の山上講、下之巻の速夜という仏教行事とそれに集い、経文を唱える仏教徒が描かれている。与兵衛は、その中であつて、つねに行事に参加せず、世俗の利養のためだけに動き回るなど、仏教徒とは対照的に、信仰心を持たない人物として描かれている。

お吉殺しの場面は、時代浄瑠璃の敵役の仕業のごとく、残酷、無慈悲なものとして描写されている。それは、信仰心を欠くものの、悪人というほどでもなかった与兵衛が招いた犯行であつた。また、殺しの場以後の与兵衛を、仏教に敵対する者として捉えるならば、与兵衛の最期には、お吉を殺した罪に対する応報としての証拠の割付、閻魔王庁の法廷を想起させるような官人による捕縛や、裁きの場面を見出すことが出来る。仏教に敵対する与兵衛に救済がもたらされることはない。

結局、本作は、主人公に、信仰を支えられた「行為」が見いだせるかどうか、そのなりゆきを追求したものである。劇の展開としては、与兵衛に反省を促す出来事として、老父母の苦悩と異見、お吉

の異見、小栗八弥の一件や、お吉殺しの後に出現する地獄の光景などを設けている。与兵衛という人物は、最後に至るまで、未来成仏とは無縁であつた。欲望の赴くままに振る舞い、また自覚的に罪を重ねてゆくことで、堕ちてゆく結末を迎える。

注

- ① 未来社、一九五七年。引用は、第六章「『女殺油地獄』の位置」による。廣末は、「行為」について、次の通り述べている。
 単なる行動ではなくて、意志的な行為の発見がそこに起こる。そして、その意志的な行為を通すことによつて、日常性を超えた葛藤の必然的な連関を顕在化し、同時に、そのような葛藤を典型的に生きる主人公を創造しはじめる。(『増補近松序説』第一章「近世悲劇への道」)
- ② 「女殺油地獄」『國文学解釈と鑑賞』一九七四年九月。
- ③ 「文学」一九七五年十月。『近松世話浄瑠璃論』(和泉書院、一九八六年)所収。
- ④ 『近松序説』第二章「近世悲劇への道」。注①に同じ。
- ⑤ 心理の問題とは、自白が果たして与兵衛の悔悟・懺悔の表れであつたのか、否かについての議論である。ここでは、最初の論争である坪内逍遙『近松之研究』『女殺油地獄』を讀みて所感を記す(春陽堂、明治三十三年)と、藤村作『上方文学と江戸文学』(至文堂、大正十一年)を例にあげる。逍遙は、勘当された与兵衛が三度、内面の変化を逃けたと解釈し、三度目の変化の表れが、問題の自白の場面であると言う。藤村は、逍遙の解釈に対して「彼が自白も切羽詰つての自棄的の自白で、悔悟・懺悔の自白ではない」として、内面の変化を認めていない。逍遙

の解釈は、井口洋「女殺油地獄」論——立聞きと食違い——」（『文学』一九七五年十月）などの論考によって支持されている。

⑥ 『文学・語学』一九七六年一月。

⑦ 『日本文学』二〇一一年七月。

⑧ 「王舎城の悲劇」とは、『観無量寿経』の序文や『涅槃経』など多くの經典で説かれている仏教説話であり、その本身は、阿闍世王が父である頻婆沙羅王を殺害したという古代インドのマガタ国において実際に起こったとされる一連の事件である。

⑨ 結句の分類、名称は、向井芳樹「世話浄りの結句について」（『日本文学研究』一—一九六九年三月（『近松の方法』桜楓社、一九七六年所収））によるものである。

⑩ 「釈迦如来誕生絵」の本文引用は、『近松全集八』（岩波書店、一九八八年）による。

⑪ 『近松論集二』一九六三年七月。『語り物と近世の劇文学』（桜楓社、一九九三年）所収。

⑫ 大久保忠国『鑑賞日本古典文学 近松』「女殺油地獄」解説 角川書店、一九七五年。

⑬ 田谷博吉『近世銀座の研究』第五章「近世中期の銀座」吉川弘文館、一九六三年。

⑭ 『説史総覧』人物往来社、一九六六年。

⑮ 内山美樹子は、『関八州繫馬』とその周辺（『歌舞伎研究と批評八』一九九二年）の中で、近松が「梟狩剣本地」（正徳四年）を描くにあたって、『今昔物語集』巻二十五を踏まえていたことを論じている。近松の『今昔物語集』の利用は、『女殺油地獄』について認められる可能性がある。

⑯ 『地藏菩薩靈驗記』の本文引用は、『続群書類従 第二十五下』（一九

二四年）による。

⑰ 『今昔物語集』の本文引用は、『新編日本古典文学全集 今昔物語集

二』（小学館、二〇〇〇年）による。

〔付記〕「女殺油地獄」の本文引用は、『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集二』（小学館、一九九七年）による。また資料の引用に際しては、適宜表記を改め、ルビを省略した。